

仲良く助け合っていけば戦争はなくなる。

抑留中の労苦記録

山梨県 天野 民夫

(一) 出生から入隊まで

①どこで出生……山梨県南都留郡山中湖村平野

②いつ出生……大正十一(一九二二)年五月二十日

③学校……平野小学校高等科卒業

(二) ソ連軍侵攻前

①いつ入隊……昭和十七(一九四二)年一月十日

志願 現役

②入隊場所……東京青山 近衛歩兵第四連隊

③駐屯地……満州国黒河省勝武屯

(三) ソ連軍侵攻をどこで受けた

①いつ……昭和二十年八月九日払暁

②どこで……満州国黒河省勝武屯 元第五国境守備

隊勝山陣地

③どんな状況で……私は、開戦時は一二三師団歩兵

第二六九連隊第一大隊本部付下士官(元第五国境守備隊本部付)で、八月九日開戦、我方陣地もそのままなれど戦局必ずしも利あらず、八月十二日村上大隊長命で孫呉花見山師団司令部へ伝令として派遣さる。八月十二日真夜中十二時出発、腰までつかる湿地帯などを通り、夜明けごろ、いつも演習に出ている山の稜線からソ軍の戦車、装甲車を見て夜が来るまで身を伏す。夜陰に乗り、知り得た地形をちょうど山の夜明けで夢中で山地を歩き、遂に花見山の友軍陣地へ到着する。八月十四日三時ごろと思う、師団司令部参謀長に戦局の報告をする。

(四) 終戦

①詔勅……八月十五日はずっと寝ていた。夕方通信の下士官より降伏との噂を聞く。未だ参謀長よりの停戦は出ていない。八月十六日午後停戦。

②どう終戦したか……参謀長直下なのですべて命令だ。

③ 武装解除から収容所入まで……八月十七日武装解除。八月十八日花見山陣地を出て下る。

(五) シベリア抑留地への移送

昭和二十年九月十六日、東京ダモイと称しソ軍命により四、五人で一台の大八車に被服、食糧その他日用品などを満載して、九月十八日頃徒歩にて孫呉出發。この時孫呉の日本人最後の人員なり。九月二十日ごろ、野営をしながら黒河着。九月二十二日頃アムールを渡河、ブラゴエシチェンスクに入る。

その間、シャワーに行っている間に例の荷物満載の大八車は一台もなし。

(六) 抑留地の生活

収容所に入る前にジャガイモ掘り約十日、満州より掘って押収した水道管の布設工事十五日くらい。

① 第一次収容所どこ……十月三十日、エロフエイバ

プロビチ

収容人員……約千人

② 生活の様子

住まい……狭い部屋に約四十人くらい。壁を頭に
して一人の幅約一mくらい。

食事……黒パン、スープ。スープはほとんど実な
く汁だけ。

仕事……連日雑仕事、軽作業級

③ 作業の状況

主作業……入ソ時、師団各部隊の義勇隊の年少
者、軍属関係の年長者、練兵級くらいの体の悪い
者の集まりで、健康上の第三種？ ゆえ、森林伐
採、炭坑入りはなく、仕事は割に軽作業だった。

なお、この町がシベリア鉄道の主要駅で、石炭、
水、砂、車軸等の補充駅だった。

④ 給与……なし

(七) 労役

① どういう労役についたか……皮革工場、大工の手

伝い、機関庫の左官手伝い、各個人の家内壁
塗り。

② 収容人員……約五百人くらい

宿舍……一時は倉庫のような建物。

③ 冬最低温度……約零下三五度くらい

冬はどうして生活した……ペーチカあり、石炭も

割合あった。

④ 労役の時間……約八時間位

⑤ 労役に堪えられない者はどうされたか……悪い者

は入院だが、日中室内で休んでいた人もいた。

⑥ 健康管理は……自分でほどほどに。

⑦ 常日頃健康を保つ上で役に立つことは……常に自

分の意志だと思っていた。

(八) 抑留者の統制管理

① 労役につく基準……いろいろな仕事があるので、

それぞれ毎日同じ仕事でなく適当に割り当てた。

② 健康管理……常日頃、食事と仕事など考えてい

た。

③ 点呼・作業場への出入……自分も約四十人くらい

の小隊長をしていたので、その人達の点呼（仕事

は別々）、帰った時の状況などに注意していた。

④ 着衣・衣服……入ソ当時着用していた軍服をその

まま連日着用。

⑤ 食事の状況……少ししかなく配分に苦勞する。

⑥ 休日……ほとんどない。月一日か二日くらい。

⑦ 洗脳教育……共産教育は何でもわかったような顔

をする。

(九) 抑留中の生活と極限状態

① 乗りこえてきた信念……自分が仮にも小隊長と言

われ、数十人のことを思えば、何が何でもこれら

の人たちのことは責任を持って見てやるのだと自

分に言い聞かせてきた。

② 生死の境、死に直面したときの感想……まして、

生死の境なんていう場面は想像もできない。この

部下数十人を見ることが今の私の責任だと考えて

いた。

(十) 帰還

昭和二十一年十二月二十四日 帰国のため身体検

査

〃 十二月二十五日 帰国編成 三百人

昭和二十二年一月二十三日 エロフェイバプロビ

チ発。ところが貨車は西進、一月二十八日チタ着

〃 三月二十三日 チタ発

〃 三月二十五日 アマザール着

〃 三月二十六日 アマザール発

〃 三月二十八日 再度チタ着

〃 四月十七日 チタ発 二百人

〃 四月二十三日 ナホトカ着

〃 四月二十八日 収容所入り

〃 五月二十四日 ナホトカ発 乗船

〃 五月二十七日 舞鶴入港

〃 五月二十八日 日本本土舞鶴上陸

〃 五月三十一日 舞鶴発

〃 六月一日 帰宅

収容期間……約二年

(十一) 帰国後の生活

シベリア抑留の苦難は人生によく試練だと思つた。幸い、東京電力㈱に入社できて無事定年退職し、現在は息子の時代で(市役所勤務)、妻と平

穩に暮らしております。

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

主義主張は違つても戦争は絶対にしないこと。

国民にもっと道徳教育をしてほしいこと。

個人に対し、社会に対して責任のある人間になつてほしいこと。

抑留中の労苦記録

山梨県 青木和夫

(一) 出生から入隊まで

①どこで出生……静岡県沼津市大岡下石田

②いつ出生……大正十五(一九二六)年十一月二十

八日

③学校……尋常高等小学校―旧制中学校卒業

(二) ソ連軍侵攻前

①いつ入隊……昭和二十(一九四五)年五月

現役・召集